令和６年度小学校教科教育推進研修（国語科）研修成果物（指導について）

指 導 者　Ｃグループ　尾道市立栗原北小学校　　中平　美沙希
指導学年　　第２学年　23人

1　単元名及び教材名

ビーバーのひみつを見つけよう「ビーバーの大工事」（東京書籍「新編　新しい国語　二下」）

2　児童観

本学級の児童は、１年生からフレームリーディングの手法を用いた学習を行っている。説明的な文章の学習については、「段落」「はじめ・中・おわり」「問いと答え」等の「目のつけどころ」を獲得しながら読む学習に取り組んでおり、キーワードとなる重要な語や文を選び出す力が育ちつつある。学習のはじめには、文章を読んで感じたことを基に問いづくりを行っている。

「たんぽぽ」の学習では、児童にとって身近な「たんぽぽ」について知っている知識を共有したり、自分の経験と重ねたりしながら文章を読み取っていった。言語活動として、文章の構成に着目しながら、図鑑やカードにまとめる活動を設定した。その際、図鑑から重要な語や文を選び出すことができる児童は87%であった。文章を読んで感じた思いを書くことは 96%の児童ができるが、自分の体験と結び付けながら文章に表すことができる児童は13%であった。１年生で自分の体験と結び付けることを意識させた学習経験がないため、２年生で経験させることが重要である。

3　指導観

指導に当たっては、自分の経験とビーバーの体の特徴や生態を比べながら読むことができるようにするために、水泳の授業や食べ物を食べるときの経験を想起させる声掛けを行う。その際、ビーバーと自分を比べて違うところや似ているところをワークシートに記入しておき、ひみつを選択する際に見返すことができるようにする。また、自分と結び付けながら教材文を読めるようにするために、単元のはじめに問いづくりを行い、ビーバーや単元への関心を高める。一人一人の問いを全体で共有し仲間分けを行い、みんなで考えたい問いを選び、単元の中で答えを見付けていく。

文章の内容に対する感想を表現させる際には、一番すごいビーバーのひみつを選択し、理由を、叙述をもとに考えることができるようにするために、段落のまとまりや内容の大体を把握し、ノートに整理する。ビーバーの体の特徴とダム作りのひみつとしてまとめる。ビーバーがなぜダムを作ることができるのかについて、楽しんで文章から情報を見付け出せるように、ダムを作るための体の特徴、ダムを作る手順、巣を作る手順をまとめて「ビーバーのひみつ」と総称する。

4　指導と評価の計画（全 10 時間）

次	時	学　習　内　容	評　価			
			知	思	主	評価規準・評価方法　等
一	1・2	○扉の挿絵について問いかけ、教師の範読を聞き、問いづくりを行う。 ○児童の問いから、単元の見通しをもつ。 〈児童の問い＞ ・なぜ、おもたい木をたおせるのか。 ・なぜ、ポプラややなぎの木を切りたおせるはをもっているのか。 ・なぜ、しっぽをオールみたいなのか。 ・どうやって木と石とどろをつみ上げてダムを作るのか。 ・どうして、みずうみのまん中にすを作るのか。				

二	3	○ビーバーが作ったものを数えることを通して、はじめ・中・おわりの構成を捉える。 <table><tr><td>はじめ</td><td>①</td><td>ビーバーの住む場所</td></tr><tr><td>中</td><td>②～⑨</td><td>ダム作りの準備</td></tr><tr><td></td><td>⑩～⑮</td><td>ダム作り</td></tr><tr><td></td><td>⑯～⑲</td><td>す作り</td></tr><tr><td>おわり</td><td>⑳</td><td>ダムを作る理由</td></tr></table>				
	4・5	○ダム作り・巣作りの順序を整理することを通して、内容の大体を捉える。	○			〔知識・技能①〕 ノート ・事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。
	6・7	○体の特徴や生態と関連づけて読むことで、ダムや巣を作ることができるビーバーのひみつを見付ける。				
三	8（本時）	○「一番すごいビーバーのひみつ」を選び、理由を文章に表す。		○		〔思考・判断・表現①〕 ワークシート② ・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。
	9	○選んだ理由を友達と交流する。 ・読む視点を全体で共有した上で交流し、友達に伝わらなかった部分を赤字で付け足し修正する。			○	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 行動観察・ワークシート①、② ・進んで、文章の内容と自分の経験を結びつけて感想をもち、学習課題に沿って、分かったことや考えたことを文章にまとめようとしている。
（家庭学習）		○「一番すごいビーバーのひみつ」をお家の人に伝える。 ・ひみつの理由を書いたワークシートを読み、お家の人にコメントをもらう。				
	10	○学習を振り返る。				

5　本時の学習

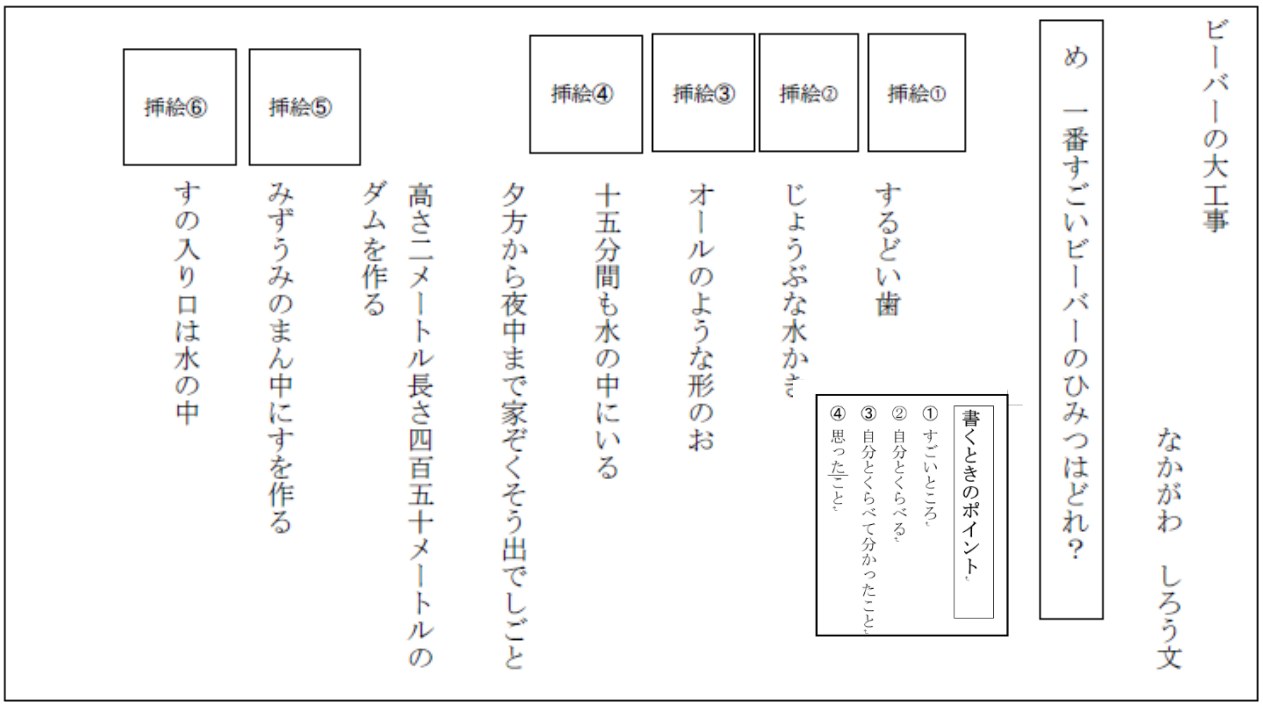
（1）本時の目標

「一番すごいビーバーのひみつ」を選び、選んだ理由を自分の体験と結び付けて考え、文章に表すことができる。

（2）学習の展開

学習活動	○指導上の留意点 □主な発問 ・予想される児童の反応 ◆「努力を要する」状況と判断した児童への指導の手立て	評価規準 （評価方法）
1．前時の学習を想起する。	□ビーバーには、どんなひみつがありましたか。 ・木を切りたおすするどい歯がある ・じょうぶな水かきがある ・オールのような形の尾がある ・15 分間も水の中にもぐることができる ・夕方から夜中まで家族総出で仕事をする ◆何人かの児童にひみつを発表させ共有することで、全員が学びの土台にのることができるようにする。	
2．本時のめあてを確認する。	めあて　一ばんすごいビーバーのひみつはどれ？ □たくさんあるひみつの中から、一番すごいと思ったひみつはどれですか。 ○全員がどのひみつを選択したか挙手させ、黒板に示す。	
3．一番すごいビーバーのひみつを選び、理由を書く。	□どうしてそう思ったのか自分と比べながら理由を書きましょう。 ○挙手した考えから、変更してもよい。 ◆前時のノートを見返し、ビーバーのひみつを想起、選択することができるようにする。 ◆前時までに自分と比べながら読んだ感想をワークシートやノートに記録として残るようにしておく。 （記入例） ・ぼくが一番すごいと思ったビーバーのひみつは、すの入り口が水の中にあることです。 りゆうは、ぼくたち人間の家は、とびらをあけるとだれでも入ることができるけど、ビーバーのすは、およぎの上手などうぶつでないと入ることができないからです。わざとすの入り口を水の中に作って、てきにおそわれないようにくふうしているところがすごいなと思いました。ぼくたちの家もかぎをかけてあんぜんにしているところがビーバーのすの入口とにています。ビーバーはちえをつかっていることが分かりました。	「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。 （ワークシート②）
4．同じ考えの児童同士でグループになり、意見を交流する。	□同じひみつを選んだグループで交流しましょう。	
5．学習の振り返りをする。	○振り返りをノートに記入する。 ○次時で、内容を加筆修正し、選んだひみつの理由を全体で交流する。	

（３）板書計画


ビーバーの大工事
なかがわ　しろう文
め　一番すごいビーバーのひみつはどれ？
書くときのポイント
① すごいところ。
② 自分とくらべる。
③ 自分とくらべて分かったこと。
④ 思ったこと。
挿絵①
するどい歯
挿絵②
じょうぶな水かき
挿絵③
オールのような形のお
挿絵④
十五分間も水の中にいる
夕方から夜中まで家ぞくそう出でしごと
挿絵⑤
高さ二メートル長さ四百五十メートルの
ダムを作る
挿絵⑥
みずうみのまん中にすを作る
すの入り口は水の中

6　指導の実際

（1）指導上の工夫

初発の感想から問いを作る

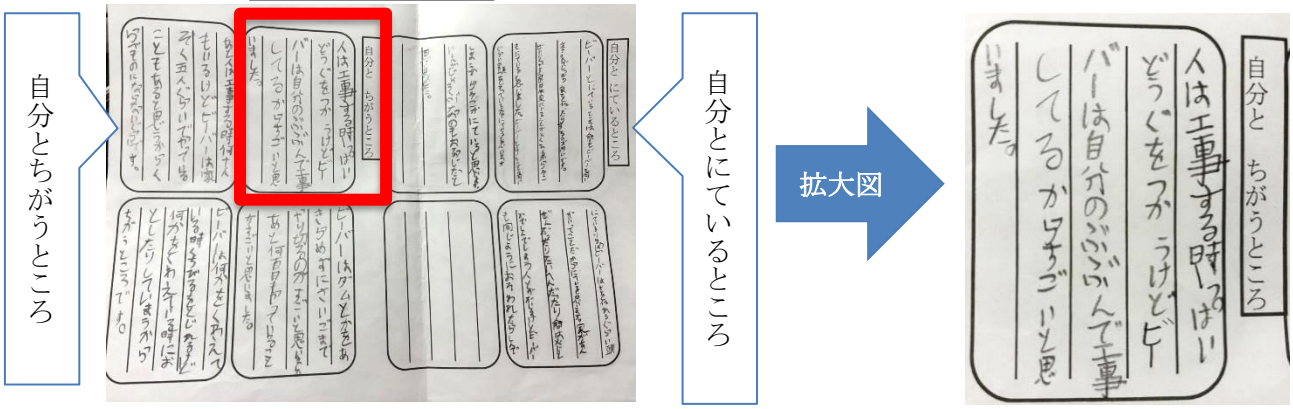
第一時に、問いづくりを行うことで、一人一人が課題意識をもって取り組むことに繋がった。ビーバーの体の特徴やダムや巣作りに疑問をもつ児童が多かったので、体の特徴やダム作りについてみんなで考えていくという学習の見通しをもった。

はじめ・中・おわりの構成を捉えた後に、児童の問い「どうやって木と石と泥を積み上げてダムを作るのか。」を第４時のめあてとし、ダムづくりの順序を整理した。児童の問い「なぜ、ビーバーはみずうみのまん中にすを作るのか。」を第５時のめあてとし、巣作りの順序も捉えた後に、湖の真ん中に巣を作る理由を本文から読み取り、泳ぎが上手な動物しか入れないように入口が水の中にあること、敵に襲われない安全な巣を作るためであることに気づかせた。

児童の問い「なぜ、重い木をたおせるのか。」「なぜ、しっぽはオールみたいなのか」「なぜ、15 分間も水の中に入れるのか。」「家族何匹ぐらいで作っているのか。」などの問いから「ビーバーのひみつを見つけよう」を第６時のめあてとし、ビーバーの体の特徴や生態についての内容を「ひみつ」として整理した。

授業後の振り返り

ワークシート①



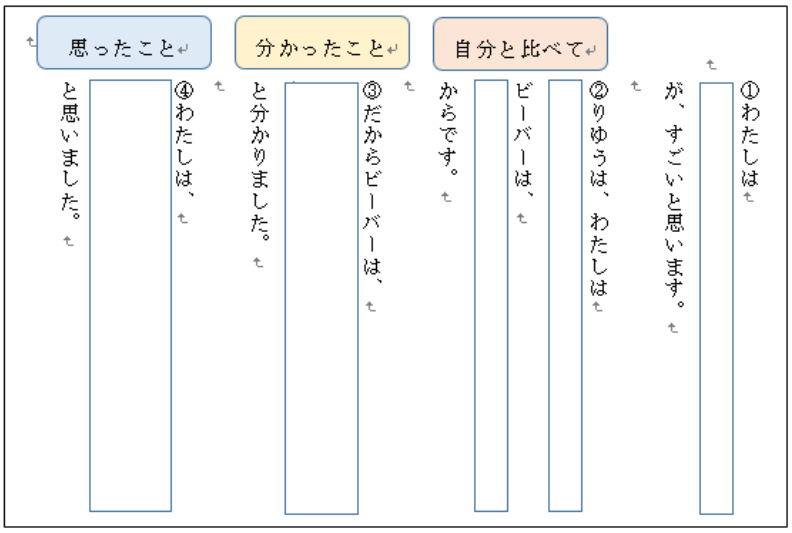
毎時間授業の終わりに、自分自身とビーバーを比べて、似ているところやちがうところをワークシート①に記入させた。毎時間継続して取り組むことで、意識的に自分自身とビーバー（本文の内容）を比べて読むことができるようになった。また、第８時の一番すごいところを選択したり理由を書いたりする際の手掛かりとすることができた。

（2）児童のつまずきと実際に講じた手立ての具体

ビーバーの一番すごいところを説明する際に「ビーバーの一番すごいところ」「自分と比べる」「ビーバーと自分をくらべて分かったこと」「思ったこと」を書けていない児童は、「努力を要する」状況（C）と判断した。そのような児童に対しては、四つの視点が書いた文章の中のどの部分に当たるのかを個別に確認する声掛けをし、足りない視点が明らかになるようにした。また、書き終わった後に、個人で四つの視点を書くことができているか確認するだけでなく、ペアで読み合い助言し合うことで改善する機会を設けた。

文章の内容に対する感想を書くために自分と比べたことを言語化するという学習経験が今までなかったので、ワークシート①に取り組むことで自分の体験と本教材に出てくるビーバーを結びつける手掛かりとなるようにした。

内容や順序などをどのように書いたらよいか分からず、困っている児童には、「りゆうは」「わたしは」「ビーバーは」などの書き出しの文を示すなどの声掛けを行った。また、下のような穴埋め式の個別のプリントを用意することも考えられる。

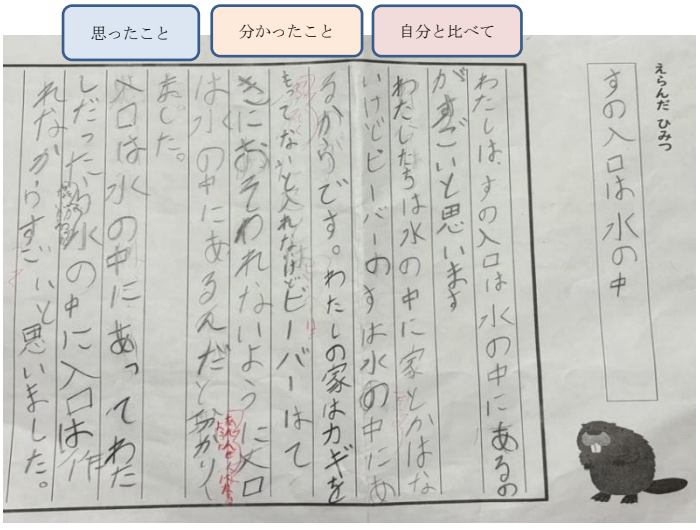


7　評価の実際

【思考・判断・表現】は、ワークシート②の記述を通して評価した。ここでは、「ビーバーの一番すごいところ」、「自分と比べる」、「自分と比べて分かったこと」、「思ったこと」の四つの視点を取り入れて書くことを指導している。そのため、一番すごいところの理由を文章に表す際に、四つの視点を取り入れて記述している児童を「おおむね満足できる」状況（B）とした。

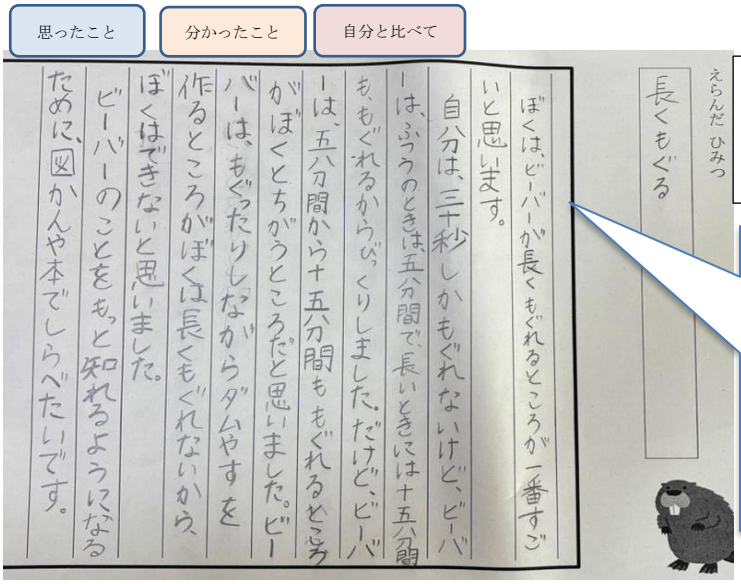
（1）評価の具体

A児は、「すの入口は水の中にある」ことをビーバーのすごいところに選び、「わたしたちは水の中に家とかはないけど、ビーバーのすは水の中にある」と自分と比べ、「わたいしの家はかぎをもっていないと入れないけど、ビーバーはてきにおそわれないようにあんぜんになるように入口は水の中にある」とビーバーと自分を比べて分かったこと、「入口は水の中にあってわたしだったらいきがつづかないから水の中に入口は作れないからすごい」と文章を読んで思ったことを述べている。文章の内容と自分の体験とを結び付けて感想を述べていると判断し、「おおむね満足できる」状況（B）と評価した。



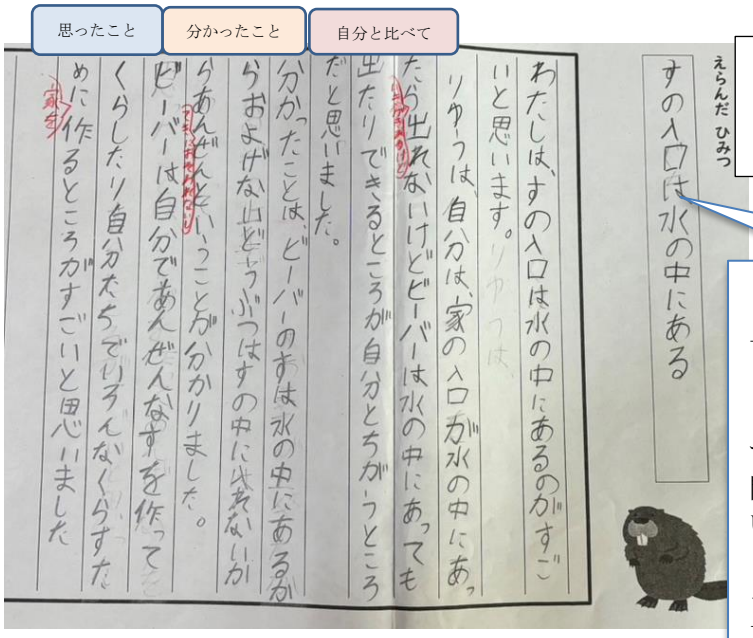
A児のワークシート②

また、文章の部分ではなく文章全体の内容を踏まえて感想を述べている児童や、さらに知りたい点や疑問などを見いだして感想を述べている児童を「十分満足できる」状況（A）とした。



B児のワークシート②
（さらに知りたい点や疑問などを見いだして感想を述べている例）

B児は、もっと知りたいことの具体として、「なぜ、ビーバーは長くもぐることができるのか。」や「教科書に書かれていないひみつを見つけたい。」という思いをもっていたが、文章化することはできていない。これらを教師が聞き取り、その内容を加味して評価した。



C児のワークシート②
（文章全体の内容を踏まえて感想を述べている例）

C児は、「すの入口は水の中にある」ことを一番すごいひみつとして選択しているが、「思ったこと」ではすを作るところがすごいと述べており、選んだひみつと思ったことにずれがあった。そこで、教師がC児の意図を聞き取ったところ、ワークシート②に述べていた内容だけでなく、「木と石とどろでがんじょうな家を作ったり、自分のために巣を作ったりするところがすごい」と話したため、文章全体の内容を踏まえて感想をもっていると判断した。

（2）児童の評価
「十分満足できる」状況（A） 5人
「おおむね満足できる」状況（B） 15人
「努力を要する」状況（C） 3人

8　成果と課題

（1）成果

ワークシート①でビーバーと自分自身の経験を比べながら授業の振り返りを毎時間行うことで、本時の考えの形成の文章を表す際に自分と結び付けることができない児童はいなかった。また、自分の考えを文章に表すのに抵抗のある児童も、自分と似ているところ、ちがうところという視点を設定することで意欲的に取り組むことができた。一番すごいところの理由を表す際も、毎時間自分と比べながら文章を読んでいたので、考えが蓄積されていて、文に表そうとする意欲が高まった。

（2）課題

「十分満足できる」状況（A）の児童の割合が低い。その原因として、引き上げる手立てが不十分であったことと、児童に今までの学びの蓄積がないこと、「十分満足できる」状況（A）と「おおむね満足できる」状況（B）の違いを明確にもつことができていなかった点が考えられる。

具体的には、文章に書かせる一番すごいところを一つに選択させることで、かえって自分の思いを十分に表現できていない児童がいた。

また、「十分満足できる」状況（A）と「おおむね満足できる」状況（B）の評価の具体を明確にもつことで、文章のみの評価に限定せず、教師による聞き取りの内容を評価の材料として加味し、「おおむね満足できる」状況（B）と評価していた児童を「十分満足できる」状況（A）としたり、「おおむね満足できる」状況（C）と評価していた児童を「おおむね満足できる」状況（B）としたりするなど、評価を改めた。

このように、評価の方法について多様な視点をもつことで、児童の良さを引き出すことに繋がると分かった。

「努力を要する」状況（C）の児童については、文章に表すことができていない児童はいなかったので、言葉で聞き取り付け加えたり、一つのひみつに限定しないなどの選択肢を設けたりすることで「おおむね満足できる」状況（B）に引き上げることができた点が反省である。

文章に表す際に「文章の内容と自分の体験とを結び付けた理解」と「文章に対する思い」を明確に分けて文に書くための指導をすることが難しいと感じた。指導者が評価の具体を明確にしておくことと、児童自身の経験を積み重ねることが改善策の一つと考える。

（3）今後に向けて

自分の経験と結び付けて感想をもつことができるように、年間計画を踏まえて、指導者自身が意図的に仕組むこと重要であると考える。今回は説明的な文章であったが、文学的な文章も想定していく。また、第１学年と第２学年の違い等も踏まえて評価基準を授業前に明確にもつとともに、「おおむね満足できる」状況（B）評価に到達できるための手立てを十分に考えておくこと、「おおむね満足できる」状況（B）と「十分満足できる」状況（A）の違いを説明できるように教材研究に励んでいきたい。